SUMMER CAMP

伊崎瞬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
SUMMER　CAMP

【Nコード】
N4490U

【作者名】
伊崎瞬

【あらすじ】
中学3年生は毎年夏に1ヶ月程度海外にキャンプに出かけることになっている。
そこで波乱万丈の生活を通して彼らはどのように変わり、その後の生活をどのようにすごすのだろうか。
今までにない新感覚の学生ファタジー！

第1話（前書き）

登場人物

・仲西宇宙（なかにしうちゅう）　中学3年生

・仲西遥香（なかにしはるか）　中学3年生　この2人は双子

・西之川健斗（にしのかわけんと）中学3年生　小学校以来の親友

・北山桜咲（きたやまさくら）　中学3年生　キャンプの班員

・冶田康次（おさだこうじ）　担任の先生

とりあえずはこの5人です。

第１話

ＳＵＭＭＥＲ　ＣＡＭＰ

僕は黒板に白チョークで書かれた英単語を眺めている。
正式には英単語ではなく行事の名前。
英語が担当である担任の治田康次（おさだこうじ）先生が話し始めた。
「今年も本校３年生はこのＳＵＭＭＥＲ　ＣＡＭＰがあります。行く場所は今年も３ヶ所です。ハワイ、オーストラリア、南アフリカのいづれかの１ヶ所です。すでに家族の方とすでに話し合いを進めていると思います。水曜日までに私のところに報告に来てください。本日は以上で終わります。」
あっさりと重要なことを言うのが治田先生だ。

もうホームルームも終わったので帰ろうと思いカバンの中に教科書を入れていると小学生のころから親友である西之川健斗（にしのかわけんと）が話しかけてきた。
「宇宙、お前どこに行くつもりだ？」
「そうだなぁ……どうせ行くならハワイじゃない？」
すると健斗は目を輝かせて僕に言った。
「やっぱり、そうだよなぁ。ほら、もしビーチとかに行ったらビキニを着た胸ｎ……」
「やっぱりお姉さん目的なんだなお前は。」
「ち、ちげぇし。中３なら誰でもする妄想だぞ？」
「中３の一部の男子、な！」
「どんだけ純粋なんだよ。」
笑いつつ、見下した感じの台詞を捨てて健斗は教室を出て行った。
健斗と話している間にカバンのなかに荷物を入れることができた。
教室には数人のクラスメイトが残っていた。適当に挨拶をして教室

を出た。
家に帰る前に急にハワイについて知りたくなったので本屋に立ち寄った。
旅行ガイドブックの売り場に足を向けた。
そして売り場に着いて本を探しているとちょうどハワイのガイドブックの売っているところにどこか見慣れた女性の後姿があった。なので恐る恐る声をかけてみた。
「遥……香？」
「はいっ？……ってお兄ちゃんか。」
恐る恐る声をかけて、恐る恐る振り返ったのは双子の妹の仲西遥香（なかにしはるか）だった。
「お兄ちゃん、どうしてここにいるの？」
「遥香だって、どうしてここにいる？」
「まぁ、今度のキャンプでさぁ、私はハワイに行きたくてさぁ。そしたらちょっと調べたくなって……だから調べに来た。」
「はぁ……遥香もかよ……」
「遥香もかよ、ってことはお兄ちゃんもなの？」
「まぁね。やっぱこういうところが双子なのかね？」
「っていっても私たちは二卵性だからね。」
「まぁね。」
結局この日は2人で7時ぐらいまでガイドブックを読んでいた。

第２話

「はい、それでは行く場所の希望の結果が出たのでお知らせします。今回はきれいに３つにわかれましたので発表後はすぐに班分けに移ります。えぇ、まずはオーストラリアです。オーストラリアは……」

淡々と先生が生徒の名前を呼んでいく。
そして僕の希望のハワイだ。
健斗も遥香も僕も無事ハワイにいけることが確定した。

そして班分けも終了した。
僕らの班員は僕と遥香と健斗ともう一人、北山桜咲（きたやまさくら）さんが同じ班だ。
そして班長は健斗だ。北山さん以外の３人は仲がよいのだが、北山さんがあまりというかほとんど僕らと話したことがない。なのでキャンプまでに仲良くなれるかを最重要課題とした。
その一歩を今日踏み出した。

その日の夕方、僕らは某ファミリーレストランに集合した。その理由は顔合わせ兼夕食会ということになっている。とりあえず、料理を頼み終えて本題に入った。
「じゃ、まずは自己紹介からしていきましょうか。」
口火を切ったのは班長の健斗だった。でもなんか合コンみたいだ……
「僕が一応班長をやらせてもらうことになった西之川健斗です。よろしく。」
いつもはみんなを笑わせるクラスのお調子者のポストにいる健斗が珍しく真剣に挨拶をしている。次に自己紹介を始めたのは遥香だった。
「じゃぁ、次は私ね。私の名前は仲西遥香です。この身長だからたまに小学生に間違われます。よろしくお願いします。」

確かに僕と遥香が一緒に歩いていると年の離れた兄弟として見られていることだろう。商店街のおばちゃんにはよく間違われる。身長153cmの遥香は映画でもまだ子供料金で見れる。
「ほんじゃ、次は僕が。僕の名前は仲西宇宙です。苗字を聞いて分かったかもしれないけど僕と遥香は双子です。ちなみに僕のほうが兄です。よろしく。」
双子というワードが出てきた瞬間に北山さんは口を軽くあけながら何度も頷いていた。なにか一人合点をしている。
「あぁ～。双子だったんですね。てっきりクラスでも仲がよかったから恋人の関係かと思いました。でも、苗字が一緒だからと思って納得してなかったんですよ。」
「でも、疑問が解決してよかったね。」
「はい。あ、紹介がまだでしたね。私の名前は北山桜咲です。『桜が咲く』と書いて『さくら』といいます。結構体力などには自信があります。よろしくお願いします。」
「おぉ～！」
僕たちの北山さんへの印象が180度変わった瞬間だった。
北山さんは普段教室の端の席でよほどのことがない限り教室を出ない。（と聞いたことがある）
そしていつも小説とにらめっこをしている。まさに「文学少女」というのがぴったりな女の子なのだ。
だけど体力に自信があるらしい。確かに余計なお肉がついていなさそう。

すると突然遥香がとんでもないことを言い出した。
「あ、北山さん。腕相撲しましょ？」
僕と健斗は飲みかけていたジュースを持ったまま遥香のほうを見た。
こいつは何を言ってるんだ……
でも遥香は相当自信があるようだ。
そういえば今年の春の体力テストで握力は学年2位の成績だった。

体力に自信があるといっている北山さんでもさすがに無理でしょう、と思っていたら
「私でよければ。」
あっさりと北山さんがOKしたではないか。これには言いだしっぺの遥香もビックリしていた。

＊＊＊＊＊＊＊

「お兄ちゃん審判して」
「はいっ。」
ということでファミレスで腕相撲大会をやることになった。で、僕が審判。
「それじゃ、いきます。あ、力抜いてね。レディー……ゴー！」
僕の合図で2人の腕相撲大会の決勝戦が始まった。

〜〜1分後〜〜

「あぁ、もうだめ！」
「う、腕がぁ……」
2人が異口同音に苦しさを表現していた。
今の戦いの状況を説明しよう……進展なし！
最初の位置でピクリとも動かずに腕だけが震えている。
「はいはいはい。今回はここまで。」
僕は試合を止めた。いつもの遥香なら「あと1分」とか言うのに今回はなにも言わずに腕の力を抜き。握っていた手を離した。
「何で北山さんは……そんなに強いの？」
息を切らしながら遥香が聞いた。
「私は……今年の体力テストで……握力だけ1位だったの。」
「！！」

遥香は肩で呼吸しながら獲物を見つけたライオンのような目つきで北山さんを見ていた。

「1位の北山さんってあなただったのね。知らなかった……」

というと急に抜け殻のような状態になった遥香が僕にもたれかかってきた。

＊＊＊＊＊＊＊

それからは普通の雑談をしながら夕食を食べた。

偶然にも健斗と北山さんが向かいのマンション同士ということが分かった。北山さんは健斗に任せて僕はいまだ抜け殻状態の遥香を家につれて帰った。

第2話（後書き）

次回作は更新が遅れると思います。
まだ書きあがっていないので……

申し訳ございません。

誤字脱字がございましたら遠慮なくお知らせください。

第３話

６月３０日の木曜日だ。
今日はＳＵＭＭＥＲ　ＣＡＭＰ出発前最後の事前学習だ。
先生から今回の真の目的がうっすら説明された。
「明日からＳＵＭＭＥＲ　ＣＡＭＰが始まります。そこで皆さんに１つ疑問が残ると思います。なぜ中３の大事な夏休みに海外にキャンプに行くのかと思っていると思います。その理由はキャンプ終了時に分かることと思います。というか、全員無事に帰国し、このように集まったらお話します。この理由がなんなのか考えながらキャンプするのもいいかもしれないですね。」
意味深な発言を残して治田先生は会議室を出た。これではなしは終了だという意味だ。僕たちの頭の上には「?」がたくさん浮かんでいたと思う。
ちらっと隣に座っている遥香をみる。
アイコンタクトで「話すならもう少し話せ！」という意思交換をした。
これじゃなかなか噛み切れないホルモンのようだと一人で突っ込みを入れた。

その後、教室に帰って４人で話をした。
「どういうことなんだろうな……」健斗がぼそっとつぶやく。
「全く見当つかないわ。」
「同感だ。」
僕は北山さんの意見に同意した。しかしここでも１人全く違う人がいた。
「もしかして、ここって中高一貫なのかな?……なんちゃって」
遥香が人差し指を立てていった。遥香の説明は意外にしっかりしていた。

確かにそういわれればそうなのかもしれない。中学入学前に「クラス編成テスト」と呼ばれるものがあった。ちょうど私立中学校の入学試験の時期に実施された。

しかし、僕らには合格通知や不合格通知の類は全く届かなかった。そのほかにも理由があるようだがこのことが1番しっかり筋が通っていた。

「確かにそれもそうだよなぁ。つーかこの学校内に高校なんてないし。どこか別の場所にでもあるのか？」

「最悪の場合、キャンプから帰ってきたら勉強漬けの日々を過ごしたり……」

「遥香、今それを冗談でも言われたら……ちょっと……」

「あぁ、ごめんなさい。」

遥香が謝って一時の沈黙が流れた。不意に口を開いたのは健斗だった。

「仲西はそういうところがあるもんなぁ。」

「「ん？」」

2人同時に返事をした。苗字で呼ばれるとどっちをよんでいるのか分からなくなってしまう。

「あぁ、遥香ちゃんのほうね。遥香ちゃんのほう。」

それに遥香は少し腹を立てた。

「もう、苗字で呼ばないでよ。2人とも一緒なんだから。」

「でも、つい苗字で呼んじゃうんだよね。最近2人が一緒にいることってあんまりないじゃん。だからくせがついちゃって……」

頭をかきながら必死に弁解している健斗。

「じゃ、呼び方を決めましょう。ごっちゃにならないように。」

このとき北山さんのもう一つのいいところを見つけた。それはいかなるときも冷静に物事を判断できるというところだ。キャンプでは班長以上の働きをしてくれそうだ。

「んじゃ、俺は普通に健斗でいいよ。」

「私は、う～～ん……遥香でいいや。」

「僕もそのまま宇宙で。北山さんは？」
「みなさんの呼びやすい言い方でお願いします。」
にっこりとわらった顔で答えられちゃ、少しはドキッとするだろうよ。遥香には若干気づかれているが。
「じゃ、俺からは北山で。」
「私は桜咲ちゃんって呼ぶね。」
「僕は北山さんで。」
それぞれ北山さんの呼び方が決まっていった。
「私はまだみなさんと距離がありそうなので、くん付け、ちゃん付けで呼ばせてください。」
「了解。」
「わかったわ。」
「おっけー」
呼び名を決めたところでまたさらに距離が縮まったように感じた。
「じゃ、明日からよろしくお願いします。じゃーねー。」
「バイバーイ！」
その日は明日に備えて早く帰って遥香とともに9時にはベッドに入った。

第4話

ジジジジジジジジジ……

午前6時。本日は7月1日金曜日。いよいよキャンプ出発の日となった。

いつもより1時間早く鳴り響いている目覚まし時計を止める。

一瞬、なぜこんなにはやくなるのかと考えたのだが、すぐに恭賀出発日だということを思い出したのだった。

机の上にパスポートとドル札があるのを確認して私服に着替える。

機内に持ち込むバッグの中にパスポートと50ドルほどを入れて急いで新宿駅前のバスターミナルに向かった。

成田空港に着いたのは11時だった。

国際線チェックインカウンターの前に健斗と北山さんが待っていた。

「遅かったですね。」

白のワンピースを着た北山さんが言った。

「道が混んでたからね。」

遥香が事情を説明していると担任の治田先生がこちらに歩いてきた。

「アロ～～ハ～～。チームハワイアンのみなさん」

「こんにちわ。」

僕たちの班名は遥香と健斗が決めた。もっとましなのはなかったのはわいだろうか。

「はい、これチケットね。各自で搭乗手続き尾を済ませてくださいね。ちなみに私もハワイですので。それじゃ、アロ～～ハ～～！」

「ア、アロ～ハ～……。」

この5人の中で一番テンションが高いのは治田先生だろう。

チームハワイアンの4人はチケットとパスポート、荷物を持ってチ

エックインカウンターへ向かった。
「本日はご利用ありがとうございます。」
「あ、お願いします。」
手に持っていたパスポートとチケットを渡す。僕の担当は２０代後半の中村という人らしい。
「ハワイにはどのようなご用件で？」
「あ、学校のキャンプで１ヶ月程度。」
「ん、もしかして馬渡学園の生徒さん？」
「はい、そうですが……」
「あら〜、こんなこともあるんですね。私も実はそこの卒業生なんです。」
パソコンとにらめっこし、キーボードを打ちながら話し始めた。
「確かＳＵＭＭＥＲ　ＣＡＭＰって言う名前だったわよね？今でも詳しく覚えているの。とても辛かったわ。」
「あの、具体的にどういうことをしたんですか？」
「それがね……誰にも言っちゃいけないことになってるの。実際に同級生で１人転校になっちゃった子がいるの。あ、荷物預けるのは１つでいい？」
「あ、はい。でもそのこはなぜ？」
「キャンプの内容をほかの人に言い出したかららしいよ。」
「なぜ、そんなに厳しいのだ……
その言葉を聞いて僕が考え事に集中しようとしたら中村さんがパスポートとチケットを返しているところだった。
「手続きは以上で終了ですよ。よいご旅行を。」
「あ、ありがとうございます。」
数歩言ったところで
「仲西君？」呼び止められた。
「最後に一つ先輩からアドバイスをするわ。これをただの旅行と思ったらだめだよ。修行だと思わないと１ヶ月持たないよ。これが私から出来る唯一のアドバイスです。」

そういうと笑顔で手を振ってくれた。僕はお辞儀をしてその場を後にした。

第5話

「おい、宇宙。遅いぞ。」
「わりぃ、わりぃ。」
右手にパスポートとチケット、そして左手でごめんという動作をしてすでに手荷物検査場の前に集まっている3人の元へ走っていく。
ようやくチームハワイアンの４人がそろった。
無事に手荷物検査を終え、搭乗ゲートの前のベンチに座りながらゆっくりさっきの話をする。

「そういえばさっき、うちの学校の卒業生とか言う人と話をしたんだ。」
3人それぞれ違うことをしていたが手を休めて僕の周りに集まってきた。
「いつ？」
遥香が聞いてきた。
「さっき、搭乗手続きしてもらった係りの人がうちの学校の卒業生らしいんだ。そしてその人の話によると……」
僕は3人に普通のキャンプと思ってはいけないこと、内容をしゃべったことで学校を転校した人がいることを正確に伝えた。みんな話を聞いてる途中から真剣な表情で話を聞いていた。
「おい、それまじかよ……」
「やっぱり、おかしいとは思ってましたけど……」
先に口を開いたのはやはり健斗だった。
「ま、そういうことだから今のうちから覚悟をしていたほうがいいかもね。」
北山さんも難しい表情を浮かべている。
「そうだけどさ……なんで今このタイミングで言うかな？」
「着いてからのほうがよかったか？それじゃ遅くなっちゃうと思っ

て。」
「ま、聞いてしまったことはしょうがない。気分を戻して張り切って行こうじゃないの！」
「遥香はいつもポジティブでいいよな……」
「ネガティブになるな兄よ！」
「あほ……」

キンコンカンコーーン♪
「ANLからハワイ行きの便にご搭乗されるお客様にご案内申し上げます。機内へのご搭乗の準備が出来ましたのでこれより順次、お客様を機内へご案内いたします。……」
アナウンスが一通り流れたので僕たちはすでに出来始めている列の後ろに並んだ。僕たちの後ろにも続々と人が並んでくる。よく見ると20人ぐらい後ろに治田先生が並んでいる。ほぼ、手ぶらに近い状態だ。
僕たちの番が来てチケットを機械に通す。
そしてボーディングブリッジを通って飛行機に乗った。
この飛行機は結構新しい感じのBOEING777―300ERだ。
座席番号を確認しながら奥へと進む。幸いなことに僕たち4人はエコノミーの1番前と2番目の位置だった。
「えっと僕たちの席は……あった。ここだ。えっと僕が窓側か。」
「お兄ちゃんまった！私が窓側がいい。」
「はぁ？遥香？急にどうしたの？」
「だから窓側がいいの。」
「なんで？」
「いっつもお兄ちゃんが窓側じゃん。そんなのずる〜い。」
「別にずるくはないでしょ。」
「こんな可愛い妹の隣に知らないおじさんが来て変なことされたらどうすんのよ！」

「はぁ……遥香の我がままはいつまでたっても治らないね。分かった代わってやる。その代わり行きだけな。」
「うん。」
兄弟げんかが落ち着いたところで遥香が窓側にすわり、その隣に僕が座った。後ひとつ廊下側の座席が空いている。誰が来るんだろう。
そうソワソワしているとついに出発3分前になった。すると隣に「失礼します」といって男の人が座ってきた。僕は軽く会釈をして窓の外に目線を移した。
でもやっぱりどんな人なのか気になるのが人間だ。そっと隣の人を見てみた。

「治田先生っ！」

そう隣に座っていたのは担任の治田先生だった。
「どこのおじさんかと思いましたよ！」
冗談交じりで言った。
「馬鹿やろう！」
軽く頭を叩かれた。
そうしているとキャビンアテンダントの人が来て治田先生にシートベルトを締めろといった。
だっせぇ、といって笑ってやった。
すると飛行機は定刻どおりに成田国際空港を出発した。

第6話

「お客様、お食事はお肉とお魚どちらがよろしいですか？」
「ビーフ、プリーズ！」

治田先生とキャビンアテンダントのやり取りだ。映画を見ていたらちょうどキャビンアテンダントの方が来て食事を持ってきた。僕も遥香はお肉を頼んだ。そして先生もお肉を頼んだ。しかしわざわざ英語で言わなくてもいいと思う。出発前の英語の時間で海外で使える英語講座を勝手に開いていた。そこで「ビーフ、プリーズ！」「フィッシュ、プリーズ！」を一人で連呼していた。

「先生なんでわざわざ英語で頼んだんすか？」
「先生が生徒にお手本を示すためだ。」
「そんな、別にここでじゃなくても……ねぇ、お兄ちゃん？」
「本当だよ。ま、いいか。」
ちょっと口を出してきた遥香のほうの座席の液晶を見てみれば同じ映画を見ていた。
っていうかこれは2人で見に行ったやつだ。
食事を済ませてのこりの2時間を眠って過ごした。

「お兄ちゃん、起きて。」
「……んっ……あ……」
「もうすぐ着陸ですよ～」
「あ、はいはい。」
遥香に起こされた。結局映画を見ながら途中で寝てしまったようだ。画面が映画を選択する画面でとまったままだ。だが、もうすぐ映画サービスが終了するとのアナウンスがあった。

「シートベルトをお閉めください。シートベルトをお閉めください。」
キャビンアテンダントの方が着用を促しながら通路を進んでくる。
パッと横を見たらまだ治田先生がまだ寝ていた。もうすぐキャビンアテンダントがくるので急いでたたき起こした。
「先生、先生！おきてください！」
「ん……」
「また注意されますよ。」
「お客様すみません。まもなく着陸いたしますのでシートベルトをお閉めいただいてもよろしいですか？」
「ぅ……ん……あっはい。すみません」
『だっせー』
またはもった。
「そんなところではもるな。」
そうするとまもなくシートベルト着用のサインが出て、到着地であるハワイのホノルル国際空港が遠くに見えてきた。

「ワイハ～～～～」
健斗が到着ロビーに出てから叫んだ。
周りにいるすべての人が健斗のほうを注目している。
「おい、ちょっと離れておこうぜ。」
「そうしましょうか。」
となりにいた北山さんに言った。３メートルほど距離をとっているためだれも一緒に来ていると思っていないだろう。健斗はキョロキョロ辺りを見回しておそらく僕らを探しているのだろう。
いい加減かわいそうになったので近づいてあげた。
「おい、ここはアメリカだぞ。叫ぶなよ。」
「Ｏｈ！ｓｏｒｒｙ！ｓｏｒｒｙ！」
「お前はふざけてるのか？」

「ＮｏＮｏＮｏ！トンデモナイ！」
「僕の右のこぶしにご注意ください。３，２、１……」
「ごめんなさい！すみません、調子に乗りました……」
「もう少し落ち着きなさいよね。」
「遥香に言われるって相当だぞ。ってか遥香も落ち着けよ……」
「あぁ、もう！わかってるよぉ～」
「はいはい。喧嘩はそこまで。馬渡学園の方は一番奥のほうに集まってね。１０分後に集合を」
「了解です。」
先生が仲裁にはいってその場は静まった。
話し合った結果集合時間は１０分後だが早めに行くことにした。
いよいよ僕たちのＳＵＭＭＥＲＣＡＭＰが始まろうとしていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4490u/

SUMMER CAMP

2011年10月8日15時19分発行